

## 前回までのあらすじ

流遠<sup>るしお</sup>やみひめは、小学六年生の普通の女の子。  
学校があつて、友達がいて、好きな男の子がいる。

しかし、そんな平穏な生活は、とある少女との出会いで一変してしまふ。

少女の名はツバキ・タカチホ。

彼女は地球とは別の星・惑星ゼヘナから来たという。

ツバキの目的は〈カタストロ〉と呼称される敵性体の殲滅<sup>せんめつ</sup>であり、彼女はそのための存在——〈機獣少女<sup>きじゆう</sup>〉だった。

クラウドから〈カタストロ〉を引きはがすため、やみひめは彼女に対して〈分断<sup>ディバイダー</sup>するもの〉を使った。それが引き金<sup>トリガー</sup>になつたかのように、世界は紅<sup>あか</sup>く染まり、やみひめとツバキは『大図書館』と呼ぶべき不可思議な空間にて、クラウドの姿を借りた〈カタストロ〉との対話の機会を得る。

〈ジェネレーター〉の秘密。

〈カタストロ〉の出現理由。

ゼヘナを統治する者達が、それらを秘匿<sup>ひとく</sup>している可能性。

〈カタストロ〉によつて語られた真実にショックを受けるツバキだったが、それでも彼女は現実へ戻り、〈機獣少女〉としての使命を全<sup>まっ</sup>うした。

〈カタストロ〉を殲滅<sup>せんめつ</sup>したのだ。

その後、〈カタストロ〉との戦闘<sup>とつじよ</sup>に突如介入してきた二人の少女・ファフロウ姉妹の助力により、ツバキは内心では諦<sup>あきら</sup>めていた惑星ゼヘナへの帰還を果たす。

それから——

※登場人物紹介は[こちら](#)

機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL **XXXXXXXX**

銀河の彼方かなたにある惑星ゼヘナ。

地球と同じ『天の川銀河』に存在し、地球と酷似した環境と生態系を持つ、いわゆる地球型惑星である。其処そこには地球人と寸分違わぬヒューマノイドタイプの生物が暮らし、社会を形成し、文明を築いていた。

彼等は外見や思考形態だけでなく、遺伝情報的にも人類と酷似しており、ゼヘナに訪れた地球人と交配が可能なレベルであった。そういった理由から、不慮の事故でゼヘナに降り立った地球人達に、母星へ帰還する手段がなければ、ゼヘナに定住するのは当然の選択だろう。

どれだけの数の地球人がゼヘナに移り住んだのか、すでに記録は残されていない。ある者は中央大陸へ、ある者は西方大陸へ、それぞれ各地に散らばっていった。

そして、東方大陸へと渡った地球人のほとんどが、日本人を始めとするアジア系人種だった。『卵が先か 鶏にわとりが先か』——今となっては判らないが、現在の東方大陸に、地球の日本文化の影響が色濃くあるのは、そういった事情を抜きには語れない。

だが、地球人が移住したからといって、文明水準が地球と同様になるとは限らない。資源的な理由だけでなく、環境的、倫理的、宗教的、思想的な理由にも影響される。

もつとも大きかったのは『機獣きじゅう』の存在だ。ゼヘナに生息する、巨大な金属生命体。この星では機獣を兵器とする事が大前提とされていたため、あらゆる軍事技術が、機獣の存在ありきで考案されていた。故に、地球のような戦車や戦闘機は疎かおろ、精密誘導兵器や、無人攻撃機といった発想もなく、人間が機獣に搭乗して有視界戦闘を行うという、当時の地球人から見ればアナログな戦争を繰り返していた。

そういった理由から、兵器開発によって加速するはずの文明の進歩は遅かった。民間に転用されるような技術革新も滅多に起こらず、機獣関連の技術ばかりが進むという、歪いびな進歩を果たしていた。

その結果、ゼヘナから戦争がなくなった現在においても、東方大陸の文明水準に関して言えば、二十世紀末の日本と同レベルだった。

それでも、生活基盤インフラは整備され、街並みは整理され、市街地であれば背の高いビルが並び、道はアスファルトで舗装されているのが当たり前。個人の平均的な生活水準も高く、〈カタストロ〉という脅威が存在する事を除けば、惑星全体で見ても安定していると言えるだろう。その唯一の脅威ですらも、〈機獣少女システム〉が確立した今では、脅威とも呼べなくなりつつあるのだから。

しかし——文明水準と人間の幸福は、必ずしも一致しない。

物質的な豊かさと、精神的な豊かさは、同義ではないから。

第十八話

『ハタンスルセカイ』

オオミヤ・シティ。

東方大陸の中央に位置する大都市で、同大陸の首都としての機能も此処に集約されている。政治・経済の中心という事もあり、人口密度は高く、大量に必要とされるエネルギーを賄うため、〈ジェネレーター〉の設置数も多い。

〈ジェネレーター〉の設置数が多ければ、それを護るために配属される〈機獣少女〉の人数も必然的に増える。更に、首都という重要性を鑑みれば、万全の防衛体制を敷くのは当然だろう。

「――滅せよ!」  
アニヒレイト

凜とした少女の声が戦場に響く度、聞くに堪えない断末魔の叫びが上がる。神経に障る生々しい叫びだ。当然だろう。叫びが一つ上がる度に、『敵』とはいえ、命が一つ消えていくのだから。

それに加え、血などの体液を流し、肉片や臓物と思しき部位をまき散らされれば、嫌でも『敵』が生き物である事を認識させられる。〈カタストロ〉であれば、砂のような粒子となつて崩壊するため、後には何も残らない。

〈カタストロ〉。

それは戦争のなくなった惑星ゼヘナに現れた、人類の脅威。新たな発電システムである〈ジェネレーター〉を指し、その半径約五キロメートルの空間を道連れに『消滅現象』を引き起こす、文字通りの『災厄』。

だが、今、少女達が戦っているのは〈カタストロ〉ではなかった。

「何なんですか! ねえ! 何なんですか、こいつら!」

「知らないわよ! ちゃんと援護して!」

戦場となった市街地に、少女達の悲痛な叫びが響く。

平日であつても、行き交う人々で賑わうはずの大通り。本来であれば彼女等も、談笑しながら目的地を目指す歩行者であつただろう。

しかし今だけは、それが許されない。身に纏う煌びやかな戦装束と、戦うための武器を手にしている今だけは。

彼女等もまた、〈機獣少女〉だから。

「ひいひい——ッ!」

年下であろう〈機獣少女〉が、反射的に身を屈めて『敵』の攻撃を躲した。その代償として、攻撃は少女の背後のショーウィンドウを粉々に破壊し、展示されていたマネキンは、着せられていた最新のファッションごと粉碎されてしまっていた。

背後の惨状を首だけを動かして確認し、彼女は再び前方を向く。当然そこには、この惨

状を引き起こした元凶が立っている。

「うあ……………あ……………」

からだ 身体が竦んでしまい動けない。

実戦は何度が経験した。まだ〈カラストロ〉を自分の手で殲滅した事はないが、すでに場数は踏んでいる。〈機獣少女〉として、多少の自信もついていた。

しかし、目の前の『敵』は未知の存在だ。

〈カラストロ〉とは違う。見た目の話だけではなく、根本的な何かが違う。

言葉には出来なくても、それだけは本能的に判る。

「……………っ!？」

目が合った。

怖い。

生物としての根源的な恐怖。

それは、確実な死へと意識が直結してしまう怖さだ。

殺される——という。

「た…………たす…………けて……………」

大粒の涙を流し、少女が助けを乞う。無理もない。見たところ、中学校に上がったかどうかといった年頃だ。むしろ、当たり前前の反応だろう。護るべき子供達に戦闘行為を行わせている方が、よほど狂気の沙汰なのだから。

「うわああああああああああああああああああああああああああああ——ッ！」

れっばく 裂帛の気合——いや、無我夢中で叫んだといった方が正しい。年上であろう、もう一

人の〈機獣少女〉が、手にした得物で『敵』を背後から串刺しにしていた。見れば、彼女も恐怖と涙で顔をくしゃくしゃにしている。

「あ…………あ…………あ…………っ」

震えて歯の根が合わず、決定的な言葉が発せない。MBデバイスはそのままでも強力な武器だが、アクセイペイト・ヴォイス 発動言語を唱えて機力を送り込まねば、殲滅のための威力は発揮されない。面倒な操作が必要ない音声入力だが、こういう状況では弊害となる。

まだ、『敵』は生きている。生きて反撃の機会を窺っている。二人の少女、どちらから殺すか考えている。殺されないために少女が取るべき行動は一つしかない。

「あ、あ…………滅せよ!」

それは純粹な叫びだ。相手を殺すためでなく、ただ自分が生き残るためだけの、純粹な本能による叫び。

誰だって死にたくない。

たとえ誰かを犠牲にしても。

年上の少女の得物——槍型のMBデバイスが主の声を認識し、その命令を実行する。

すなわ 即ち、機力を威力に転化する。

『敵』の胸部から突き出た穂先が、派手な青白い閃光を放つ。本来はもつと小規模な輝きだ。威力に変換しきれなかった余分な機力が、光に変換されて放出される現象。つまり、機力の制御が上手くいかなかった結果と言える。

戦場で無暗に光など見せれば、目立って自分の位置を知らせてしまう。故に、機力の制御は〈機獣少女〉が最初に教えられる基礎とも言えるが、今の彼女に、形振り構っていられる余裕はなかった。

ありつただけの機力を注ぎ込んだ結果、過剰な威力は『敵』を殲滅し、その肉体を破壊し尽した。

「はあはあ……」

「……………先輩——」

槍を構えたままの年上の少女が、荒い呼吸を繰り返す。

年下の少女は、べたんと座り込んだまま、呆然と自分を助けてくれた先輩を見上げる。

二人とも、木っ端微塵となった『敵』の体液や肉片に塗れて、形容しがたい状態となっている。だが、そんな事に構っている余裕はなく、年下の少女が安心感を求めてか、地面に座り込んだまま、年上の少女の腰に抱きついた。そのまま嗚咽交じりに声にならない声を上げて泣くと、抱きつかれた方も、ようやく緊張状態が解けたのか、自らも座り込み、年下の少女の抱擁に応えた。泣いているのは、年下の少女だけではなかった。年上と言っても、いくつも離れているようには見えない。彼女もまだ、高校生にはなっていないような年齢だろう。

しかし、何時までもこうしてはられない。戦闘は続いている。耳を澄ますまでもなく、あちこちから物騒な音が聞こえてくる。破壊音。爆発音。悲鳴のようなものも混ざっている。

二人で孤立しているのは危険だ。味方と合流した方がいい。〈機獣少女〉の使命は〈ジェネレーター〉の防衛であり、遊撃のような役割は彼女等には荷が重い。

年上の少女が行動方針を決めていると、先ほど破壊されたショーウィンドウがあるのは逆の通りの喫茶店の窓が内側から吹き飛び、彼女等と同世代くらいの少女が姿を現した。身に纏った衣装の特殊さで判る——〈機獣少女〉だ。すでに満身創痍で、二人のすぐ隣に着地すると、糸が切れた操り人形のように倒れ伏した。意識は完全に失われている。〈機獣少女〉の戦装束であるMBジャケットには、装着者の意識を強制的に保ち続ける機能があ

る。それすらも働かないという事は、とうに限界を超えてしまっている事になる。满身創痕はその結果だろう。

「くっ……」

年上の少女が歯噛みする。倒れている少女に同情したというもある。だが、それ以上に厄介事を持ち込まれた事に対する苛立ちもあつた。〈機獣少女 だけのはずがない。彼女をこうした相手が近くにいるはずなのだ。〉

「ああ……っ」

年下の少女が絶望を滲ませた声を上げる。先ほどの喫茶店の壁が内側から破壊され、そこから新たな『敵』が姿を現す。

しかも——複数いる。

二人がかりで、ようやく一体仕留められた。すでに年下の少女は恐慌状態で、年上の少女も機力を消耗した。この状況で、更に複数の敵を相手にするのは不可能だ。

どうすれば突破口が切り開ける？ 交渉は可能か？ 倒れている少女も、年下の少女も置いて、自分だけなら逃げ切れるだろうか？

ありとあらゆる考えが、年上の少女の脳裏に浮かんで消えていく。

しかし——

「行ってください。私、動けない。先輩の足手まといになる……」

ぼろぼろと涙を流しながら、言葉とは裏腹に、年下の少女は先輩の腰に回した腕に力を込める。言葉では強がっていても、行動が追い付いていない。まだ幼いと言ってもいい年齢だ。置いて行つていいなどと、思えるはずがない。先の言葉だけでも、彼女は十分に立派と言える。

「……そんなにぎゅっと抱き締められたら、行けないよ」

苦笑して、年上の少女が後輩の頭を撫でた。『敵』の体液でべっとり濡れているため、美しい光景とはお世辞にも言いがたい。

「ごめんなさい……」

「いいよ。あんたを置いて逃げたら、生き延びても、もうこんな風に笑えない」

年下の少女は、何かと要領が悪く、世話のかかる〈機獣少女〉だった。それでも、年上の少女にとっては初めての後輩だった。特に意識はしていなかったが、彼女はそれなりに、後輩の少女を大事に想っていたようだ。

「ごめんね、駄目な先輩で。あんた一人、護ってやれそうにない」

彼女等に継戦能力が残っていないと判断したのか、『敵』が迫ってくる。数は五体。戦術という概念があるのか、包囲陣形で、ゆつくりと輪を狭めてくる。

どうしようもない。

少女達に出来るのは、ただ互いの身体をぎゅっと抱き締め合う事だけ。年上の少女だけが、かろうじてMBデバイスを片手で握って、『敵』に睨みを利かせているが、それが虚勢である事は明らかだった。

それでも意地がある。

〈機獣少女〉として。

そして、一人の人間として。

「——っ!?!」

異変は唐突に起きた。

上空から——五本の剣が降ってきた。

いや、正確には四本だ。装飾の一切ない、木刀のようなシンプルな柄をしたカタナ——別名、サムライ・ソード。上空から飛来したそれらは、一本ずつ正確に、四体の『敵』の胸部を串刺しにした。五本に見えたのは、五本目のカタナの使い手が、武器と一体化して見えたためだろう。上空から地面に着地しつつ『敵』を縦に斬りつけ、更に刃で刺突する流れるような動きは、カタナそのものだったから。

「——滅せよ」  
アニヒレート

カタナを手にした少女が、落ち着いた口調で聞き馴染みのある言葉を発した。直後、五本のカタナが青白い輝きを瞬間的に放つと、スイッチが切れたように、すべての『敵』がその場に頽れた。上空から降り立った少女に斬りつけられた『敵』だけが直立していたが、支えであったカタナを抜かれてしまえば、他と同様に地面に転がるしかない。

一瞬の出来事だった。

見れば、他の四体を串刺しにしたシンプルなカタナが消えている。あれは機力で生成されたもので、先の発動言語によって威力に転化されて役目を終えたのだろう。そんな芸当が出来る者など限られている。

カタナを手にした少女が得物を扱うように振ると、刀身に付着していた『敵』の体液が地面に飛散する。消えた四本のカタナと異なり、それだけは柄に黒い装飾が施されている。

黒い袴と、白を基調にした振袖のようなMBジャケットを身に纏い、カタナのようなMBデバイスを振るう、長い黒髪をした高校生くらいの〈機獣少女〉——

「〈戦姫〉……」

傍らで、年下の少女がぼつりと呟いた。その言葉に内心で頷きつつ、年上の少女は、

自分達の窮地を救ってくれた〈戦姫〉から目が離せなかった。その存在に、すでに心を奪われていた。

圧倒的な存在感。けして派手ではないのに、周囲に埋没してしまわない。雑踏の中でも、すぐに目に見つけてしまう。認識してしまったが最後、目が逸そらせなくなってしまう。手にしたカタナと同じ、研ぎ澄すまされた刃のような美しさ。

それが〈戦姫〉。

カナコ・T・シングウジという〈機獣少女〉だった。



「――あつ」

声をかける暇もなく、駆け出していたカナコの背中を見送る少女達。そんな彼女等の前に、赤を基調としたミニスカートと和服を組み合わせた衣装の少女が降り立った。

蒼玉サファイアのような青い瞳。左側でサイドテールにした、セミロングの黒髪。十一歳という年齢相応の小柄な体躯でありながら、その表情は大人びていて、戦場にいるとは思えない落ち着きを感じさせる。

ツバキ・タカチホ。

先ほど少女達の窮地を救ったカナコと同じ〈機獣少女〉である。手にした薙なぎ刀の形状をしたMBデバイス、〈カグツチ〉がその証だ。

「お怪我けがはありませんか？ どこか痛むところなどは？」

ツバキは片膝ひざをついて目線を合わせ、カナコが助けた一人の少女の様子を確認し、その上で、ゆっくりと優しい口調くちうで訊たずねた。

「私は大丈夫」

「わ、私も平気です……!!」

年下である少女の方はテンパっている様子が見えるが、二人とも深刻な怪我はなさそうだ。『敵』のものであろう体液まみに塗ぬり悲惨あきまな有様だが、目に見えてひどい外傷は見当たらない。

それを確かめると、ツバキは二人のすぐ隣に倒れている少女の状態も確認する。ひどく弱々しいが、呼吸はしている。ならば、すぐにでも手当を受けさせる必要がある。

「彼女を連れて移動する事は可能ですか？」

「……この子が動けないの。さすがに二人抱えて移動するのは厳しいかもしれない」

ツバキの問いに、年上の少女が答えた。

「判りました。貴女はその子を支えてあげてください。彼女は私が運びます」  
 見たところ、年下の少女に外傷はないが、捻挫の類か、恐怖による一時的なものの可能性もある。戦闘不能の二名——更に一名は意識不明——を連れていくところを襲われれば、下手をすれば全滅だ。

そう判断して、ツバキが倒れている少女を抱き上げようとする——

「もう平気です！ 私、ちゃんと動けます！ だから、その子は私が運びます……！」

年下の少女が急に立ち上がると、早口に言い放った。

「本当に平気なの？ 無理をしているのなら……」

「本当に平気です。先輩の足手まといに、なりたくないから……！」

無理をしているようには見えない。必死に見えるのは、無理をしているからではなく、本当に平気だと判ってほしいからなのだろう。ツバキはそう感じたし、年上の少女も同様らしく、苦笑を浮かべていた。

結局、年下の少女が意識不明の少女を背負い、身軽な年上の少女が護衛という役割分担に落ち着いた。ツバキも同行を申し出たが、やんわりと辞退された。今は戦力が必要な時だから——と。

「——ツバキ、あの子達は？」

少女達と入れ替わるように、カナコがツバキの眼前に姿を見せる。

「自力で動けるようでしたので、避難してもらいました」

「そう」

カナコに息を切らした様子がまったくないため、何もせずに戻ってきたようにも思えるが、周囲が静かになった事から考えれば、そういう事なのだろう。

「……私、カナコさんが本当に人間なのか疑問に思う時があります」

「あら。ツバキに褒められると嬉しいわ」

派手ではないが、隙なく整ったカナコの容貌に、喜色が浮かぶ。ツバキの発言に悪意が含まれているなどと、微塵も思っていないのだろうか。

すると、ツバキの手に行っている薙刀状のMBデバイス（カグツチ）が、時代がかった女声を思わせる機械音声を発した。

『——都合のよい解釈だな。バケモノだと思われているとも気付かずに』

実際、冗談半分、呆れ半分からの発言であって、ツバキはカナコに対する悪意などなかった——のだが、（カグツチ）はあえて曲解してカナコに伝えた。

「ふふ。負け犬の遠吠えも、今は寛大に聞き流せるわ。むしろ哀れに思えるほどよ」

しかし、カナコは意に介さず、にこにこしながらツバキの頭を撫でていた。

『くっ……』

「カグツチ、今はそんな場合ではありませんよ」

「あらあら、怒られちゃったわね」

「カナコさんもですよ」

ツバキが少しだけむっとした表情を見ると、カナコは慌てて口を噤んだ。年齢や経験「機獣少女」としての実力もカナコの方が明らかに上なのだが、関係性というかパワーバランスに関しては、そう単純ではないらしい。

「——ふふっ」

不意にカナコが笑った。それは、先ほどのやり取りの延長線上にある笑いではなく、別の事象に対する笑いに思えた。

「カナコさん？」

「ごめんなさい。ちょっと嬉しくて」

『ツバキに怒られた事がか？ よもや、〈戦姫〉にそんな性癖があったとは知らなんだ』

「カグツチ」

『……………』

ツバキに窘められ、〈カグツチ〉も口を噤む。それは主に対して逆らえない——というより、親に怒られて拗ねる子供のようだ。こちらもまた、単純な『道具と使い手』の関係ではないのだろう。

「ツバキ、地球から帰ってきて変わったわ。気付いてる？ 以前のあなたは、〈機獣少女〉になっている時、もっと無機的で機械的だった」

「あ……」

それは一種の自己暗示だった。上手くやるため。そして、失敗しないための。私情を挟む事はなくても、感情が先に立つと合理的な判断が出来なくなる。それは効率の悪化と、任務遂行の妨げに繋がる。

だからMBジャケットを身に纏っている時は、自分は〈機獣少女〉という装置だと暗示をかけた。機械的に行動し、合理的に判断するために。

そして何時しか、自己暗示をかけている事すら忘れていた。

「私は今のツバキの方が好きよ。以前のように無感情な瞳で見つめられるのも、それはそれでゾクゾクするけど」

「カナコさん……」

『ふん。変態め』

さすがに今回は〈カグツチ〉を窘められない。無論、カナコなりの冗談で、本気では

ないと思っているが。

「でも、変わったというのは適切ではなかったわね。これが本来のツバキなんだから」

カナコの掌てのひらが、そととツバキの頬ほおに触れる。

ツバキが見返すと、カナコは姉が妹に向けるような優しい笑みを浮かべていた。

「おかえりなさい——ツバキ」

地球でも、こんな風に名前を呼んでくれる、姉のような人がいた。一つしか変わらず、普段は『お姉さん』という感じはしないのに、姉のように感じた少女。

——『ツバキ!』

懐かしむような時間は経っていない。にも関わらず、声を思い出してしまうあたり、あの種のホームシックのようなものを感じているのかもしれない。その少女とは、きっともう会えないから。

「……………」

「ツバキ?」

無言のツバキに対して、カナコが戸惑とまじう。無反応ノーリアクションというのは想定していなかったのだろう。

だが——

「ただいま、カナコさん——私、帰ってきてきて本当によかった」

柔らかな微笑を浮かべ、ツバキがそう告げる。

その表情と言葉に、カナコの涙腺は決壊寸前だった。



（——何処どこかで塔が建った気がします。『キマシタワー』という名の百合ゆりの塔タワーが）

念話——一種のテレパシーによって送られてきた姉の言葉に、『魔女まじ』のような格好をした少女は嘆息した。

外見年齢は十二、三歳くらい。猫を思わせる黄玉トパーズのような大きな瞳。柔らかそうな茶色のショートヘア。快活そうな雰囲気もあって、全体的にも猫を思わせる少女だ。黒いとしんがり帽子と、同色の外套マントを纏まとうその姿は、どう見ても魔女だろう。

ベアトリーチェ・ファフロウ。

〈エグゼキューター〉と呼ばれる存在で、地球ともゼヘナとも違う世界の住人らしいが、詳細は語られていない。

「……タオ姉、何言ってるの？」

ベアトリーチェが、姉のタオエンに仕方なく答える。タオエンは冷静沈着な人物で、普段は頼れる姉なのだが、『百合』——いわゆる女性同士の恋愛・友情を描いた物語——に目がないという、残念な一面がある。

（失礼、独り言です。此方は粗方片付きましたが、其方はどうですか？）

「うん。こつちも——あれ？」

念話をしつつも、右手のカービン銃のような武器で『敵』を曲撃ちしていたベアトリーチェが、眉根を寄せる。弾は全弾命中した。なのに、倒れていない『敵』が一体いた。

「ふくん。頑丈だねえ」

見れば、立っている『敵』の胸部は浅くへこんでおり、命中はしたがダメージが通っていないようだった。形状からして、重装甲型なのかもしれない。

現状のカービン〈フェーデ・フレッチェ〉は、使い勝手が良いが威力は高くない。あまり時間をかけずに倒すなら、最大火力を誇る長砲身のライフルである〈デア・フレッチェ〉を使うべきだが、こんな市街地で使えば周囲に与える被害は計り知れない。

「だったら——」

それまでは片手撃ちしていた〈フェーデ・フレッチェ〉の砲身に左手を添え、右の脇がつつりと固定する。突撃銃を構える兵士のように。

「モード・パストレー——更なる救いを！」

上下交互に銃撃を行っていた二連装の銃口から、同時に光が生まれる。それらは集束し、より強力な一撃となって放たれた。通常は『光弾』だが、この集束モード時は『光線』となつて、短時間ではあるがビームを照射し続ける事が可能となる。それでも威力としては〈デア・フレッチェ〉に及ばないが、この直撃に耐えられる防御手段はそうそう存在しない。

ビームの照射が終わり、後方の排気口から排気熱が放出される。〈フェーデ・フレッチェ〉内部の冷却装置は最大稼働している事だろう。

「ごめん、タオ姉。こつちも今、片付いたよ」

何事もなかったように、中断していた姉との念話を再開するベアトリーチェ。その後方には、『敵』だったものの残骸が、変わり果てた姿で転がっていた。

「……ねえ。この状況って、わたし達のせいかな？」

（何とも言えません。きっかけはそうかもしれませんが、ここまで大規模な事になるとも考えにくいですから）

「でも、『バタフライ・エフェクト』って、そういうものじゃないの？」

蝶ちようの羽ばたきが、何の関連性もなきような事態の引き金になっていた——これがバタフライ・エフェクトの考え方だ。ほんの些細な出来事が大事件に発展するという。

自分達がツバキを連れ、この惑星ゼヘナに来てしまった事が、この現状を生み出してしまったのではないか——ベアトリーチェはそう考えているのだ。

（この国にも、『風が吹けば桶屋おけが儲かる』という諺ことわざがあるそうです）  
「……………」

（ともあれ、そんな事を考えても仕方ありません。今は事態の収束に全力を挙げましょう）  
姉の言葉に同意し、ベアトリーチェは、まだ熱を帯びたカービンをマントの中に仕舞うと、次のポイントに向けて移動を開始した。

二時間前。

〈オフィス・タカマガハラ〉の多目的ルームに、三十人ほどの人間が集まっていた。会議などにも使う部屋なので、椅子だけならば、この人数でも狭いとは感じない人口密度だ。

集まっているのはすべて女性で、ほとんどが十代と思われる少女である。この場所が〈機獣少女〉の所属する事務所である事を思えば、それ自体は何の不思議もない。

不思議があるとすれば、なぜこれだけの人数が集まっているかだろう。〈シネレーター〉不慮のための待機任務に就いている数名を除く、〈オフィス・タカマガハラ〉に所属している全メンバーに加え、事実上は引退状態である〈機獣少女〉までいる。

ツバキとカナコが入室すると、ちょうど来たところらしいファフロウ姉妹と顔を合わせた。

「あなた達も呼ばれたの？」

「はい。意見を聞きたいと言われました」

カナコが声をかけると、同じ年くらいの少女が答えた。カナコは十七歳なので、見た目通りなら、彼女も高校生くらいだろう。

どこか神秘的な金色の瞳。緩く波打つ銀色のセミロング。整った顔立ちと、無表情という二つの意味合いで、人形のような少女である。

タオエン・ファフロウ。

ベアトリーチェの姉で、このゼーナにおいては異邦人である。非戦闘時であるためか、魔女のようなとんがり帽子と外套マントは外しており、頭部と腰の低い位置には、狐のような耳と尻尾が見えている。

「ベアトリーチェさん、もう大丈夫なんですか？」

「うん、大丈夫。ツバキちゃんはタフだね」

ツバキに笑顔で答えるベアトリーチェも、姉と同様にラフな格好で、猫のような耳と尻尾がはつきりと確認出来る。特に隠すようなものでもないのだろう。

「——ごめんね。模擬戦が終わって、疲れてるところを呼び出して」

軽い挨拶あいさつを交わしていると、手に紙の束を持った少女が現れた。カナコやタオエンと同年代に見えるが、美人にありがちな近寄りがたさがある二人と比べれば、格段に親しみやすい印象を受ける。地味だが可愛い顔立ちに加え、表情が柔らかく、相手を安心させる雰囲気がある。

ミズキ・オイカワ。

穏やかな色を湛たたえる黒い瞳。軽くウェーブがかかった黒いショートボブ。カナコとタオエンに比べ、スタイルでは負けているが、女性としての適度なふくよかさではミズキに軍配が上がるだろう。

ほんの数ヶ月前までは、彼女も《機獣少女》として戦っていた。だが、機力きりよくを生み出すMBコアの活性値の低下を理由に、現在はスタッフとして事務所の《機獣少女》達を支えている。

「これ、資料ね。あなた達で最後みたいだから、席に着いて。状況を説明するから」

三枚ほどの紙をホッチキスで留めた資料を四人に渡すと、ミズキは自分の席に戻っていた。その背中を黙って見送るカナコの表情に、ツバキは複雑なものを感じたが、何か言葉をかける前に、

「そんな顔をしないで。ミズキが平気な顔してるんだもの、私が感傷的になる権利なんてないわ」

と、カナコは苦笑を浮かべた。

カナコとミズキは親友で、戦場ではパートナーだった。今なら判る。ツバキにも、一時的とはいえ、そういう相手が出来たから。

「私では、ミズキさんのように出来ないかもしれませんが」

「ツバキ？」

戦場に出るだけが戦いではない。それを支えるのも戦いだ。戦場に出られないのを不憫ふびんに思うのは、傲慢ごうまんというものだろう。人にはそれぞれの戦い方がある。

ミズキは事務所で。

ツバキは戦場で。

たとえミズキのように出来なくても――

「でも――戦場では、私がカナコさんを支えます」

「――っ!？」

ツバキの言葉に、カナコが息を呑む。そんな言葉をかけられるとは、想像もしていなかったのだろう。ずっと自分は気遣う側で、妹のように思っていた相手だったから。

「……………ありがとう」

ひよっとしたら、ツバキも初めて見たかもしれない。カナコが破顔し、目の端に薄っすらと涙を浮かべるところを。

「き、キマシタワ―!」

「……………タオ姉、空気読んでよ」

その様子を少し離れた場所で、見るともなしに見ていたファフロウ姉妹のやり取りには、二人とも気付いていないようだった。



〈オフィス・タカマガハラ〉での状況説明は、驚くほど早く終わった。長々と説明するほどの情報がなかったのだ。

〈カタストロ〉とは違う『敵』が現れた。数が多く、非常勤の〈機獣少女〉まで駆り出されている。判っていたのは、これだけだ。

『敵』の情報はファフロウ姉妹――主にタオエン――による情報提供があったが、〈カタストロ〉が現れる理由については混乱を避けるため伏せておくというカナコの判断があるため、非常に漠然とした説明しか出来なかった。

〈ブレケース〉。

それが現在、大量発生している『敵』の呼称だ。といっても、あくまでファフロウ姉妹の世界での呼称だが。

〈ベネディクト〉――惑星ゼヘナで言うところの〈カタストロ〉に近い存在ではあるが、〈ブレケース〉の性質は真逆である。〈カタストロ〉は他者の願いを叶えるために現れる。たとえ歪であつたり、本人の意思にそぐわぬ結果であっても、それは『願い』を叶えてくれる。故にファフロウ姉妹の世界では『祝福』という名で呼ばれた。

『願い』とは『希望』だ。

欲望であったとしても、そこには何かを成したい・手に入れたいという、強い衝動がある。

しかし、絶望は逆だ。絶望した者は何も望まない。あるのは底知れぬ虚無感や無力感。それらを、ただただ自分の中に抱え、やがて消えてしまう。

自分だけを世界から消すか、周囲を巻きこんで消すかの違いだけだ。

〈フレケース〉は『絶望』に惹かれて現れる。絶望を抱く者に手を差し伸べる。そして、周囲を巻き込んで破滅させる。

故に『呪詛』という名で呼ばれた。

ゼヘナに〈フレケース〉が現れた。

それは〈ジェネレーター〉の願いが、希望から絶望に変化したという事だ。

終わりたくても終わらせられない我が身を呪い、それにも疲れてしまったのだろう。

結果、〈フレケース〉を呼ぶに至ってしまった。

願いは希望に。

希望は絶望に。

そして、絶望は呪いに変化する。

〈機獣少女〉の存在によって安定を保ち、〈ジェネレーター〉に組み込まれた機獣の尊厳を無視し、斯くして世界は破綻した。

ツケが回ってきたのだ。

「因果応報と言ってしまうえばそれまでですが、救われませんね」

状況説明の場での、肝心な部分を濁した情報提供の内容に内心で苦笑しつつ、タオエンは無表情に呟いた。カナコとツバキにはすべてを話したが、それが正しい判断だったのかは判らない。少なくとも、あの場にいた全員に真実を告げなかったのは、正しい判断だっただろう。告げてしまえば、どれだけの〈機獣少女〉が戦えなくなってしまうったか、想像に難くない。

誰もが真実を受け止められる訳ではない。

だから人間は優しい嘘を許容する。

そういう意味では、カナコとツバキのメンタルの強さは異常だ。

「……………」

見晴らしのいい雑居ビルの屋上。どの方向を見下ろしても、市街地には瓦礫が散乱し、火の手が上がっている建物も確認出来る。それでも避難誘導は完了しているらしく、民間人の姿はなく、それどころか〈機獣少女〉の一人も見えない。タオエンが人払いを要請した結果だ。

タオエンが、その無感情な視線を上げる。下方には一体も見えなかったが、ビル周囲には十数体の『敵』——「プレケース」が滞空し、彼女を包囲していた。

その姿を一言で表現するなら、『虫』だろう。種類は特定出来ない。節のある複数の細い足を持ち、眼球ではなく複眼を備えた顔という、すべての虫に当てはまる特徴を持っているが、どんな昆虫図鑑にも載っていないシルエットをしている。強いて言うならカブトムシのような甲虫に近いが、蜥蜴のような尻尾と、軟体動物のような触手を持ち、蠟螂のように屹立する甲虫など、タオエンは知らない。まして、成人男性並みの全高の虫など。滞空しているが、翅のような器官は確認出来ず、どういった理論で宙に浮いているのかも判らない。

明らかに自分達の常識が通用しない世界で生み出された、もしくは進化したとしか思えない。

とはいえ、生物学者でもなんでもないタオエンにしてみれば興味の埒外。

「——頭れよ」  
エグゼキュート

魔法を思わせる黒いとんがり帽子と外套を頭現させ、周囲を一瞥する。

そして——

「——」

何事か呟いた。

だが、聞き取れない。音としては聞き取れるが、意味のある言語としては聞き取る事が出来ない。まるで知らない異国の言葉のようだが、言葉かどうかも確信が持てない。

すると——滞空していた「プレケース」の一体が突如、落下した。

それがきっかけになったように、他の個体も次々に落下していく。ほとんどが地面に落ちたが、数体がビルの屋上——タオエンの立っている近くに落ち、微動だにしない。表情は読み取れないが、生命活動が停止している事だけは確実に伝わってくる。

死んでいる。

地面に落ちた個体も同様だろう。浮上してくる気配はない。

「……………」

幅広の帽子で表情を隠すようにし、溜息のような吐息を漏らす。

「——ベアトリーチェ、聞こえますか？」

やがて何事もなかったかのように、離れた場所にいる妹に念話を送る。

その姿は魔女のようだが、この一部始終を見ていた者がいたなら、また別の印象を抱いただろう。

全身を黒で覆い、死を運ぶ存在。

死神——と。

「判りました。此方も次のポイントに移動します」

念話を終え、タオエンが移動を開始する。進行方向に向ける無表情は変わらず、ただ無感情な瞳で前を見据えるだけだ。

惑星ゼヘナ全域での、「機獣少女」と「ブレイクス」の戦闘は依然、続いている。

21 機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL XXXXXXXX 第十八話『ハタンスルセカイ』

機獣少女ゾイカルやみひめ *The NOVEL REVIVAL*

ここからは<sup>リバイバル</sup>再生のための物語——



## あとがき

どうも、るとおめさ流遠亜沙です。

『機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL REVIVAL』第十八話をお届け致します。

サイドストーリーを二本挟んだので、三ヶ月ぶりの本編です。え？ フォーマットが変わっている？ ご冗談を……すみません、変えました。厳密にはアバンが三人称なのは変わっていないので、一人称パートがなくなった形となります。

最後はゼヘナが舞台で、やみ子達はもう出ないの？

ちゃんと登場します。

だって『ゾイカルやみひめ』ですから。

それでは謝辞を。

まずはベアトリーチェ関連のチェックをしてくださった [enigma9641](#) さんに感謝を。ありがとうございます。今回登場した「フェード・フレッチェ」の集束モードは [enigma9641](#) さんのアイデアを採用させていただきました。命名も同じくです。

そして、ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。ありがとうございます。第七話のあとがきで『構成次第で次回、いよいよ最終話です』と書きましたが、もうちよつとわかりそうです。年内には終われると思いますが、やはり明言はしません。

だって予定が変わっちゃったんだもん☆

……本当に申し訳ありません。

もうしばらくお付き合いいただけると嬉しいです。

2016／8／7 流遠亜沙

※2016／10／15追記

今回の第十八話から、正式に『第一部』とする事になりました。それにしもな伴い、本文に若干の変更が加わっております。と言っても、構成を入れ替えたのみなので、内容自体は

変わっておりません。『つづく』の前に、それっぽい文章が追加されているのみです。

そういう訳なので、第二部は『REUNION』及び『REVIVAL』となります。せっかくなので『XXXXXXXXXX』の部分を変えたいという、単純な理由です。引き続き、『ゾイヤミ』をよろしくお願い致します。

アンケートに答える

『機獣少女ソイカルやみひめ The NOVEL XXXXXX 第二部』小説ページに戻る